

NEWS LETTER

都市史研究

THE URBAN HISTORICAL SOCIETY OF JAPAN

VOL.

71

2012
0824

残暑がひときわ身に染む毎日ですが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

ニューズレター都市史研究71号をお届けいたします。本号では7月に開催された第75回都市史研究会例会についての研究報告二本の報告要旨と今後の活動予定として10月に大山喬平氏（日本中世史）をお招きして開催されるワークショップのご案内を掲載いたします。また、2012年度都市史研究会シンポジウムのテーマ・日程・会場が決定いたしましたのであわせてお知らせいたします。巻末には科学研究費基盤研究A「都市インフラストラクチャーの史的比較研究」のため、今春に行われた南フランス・ラングドック地方の現地視察・調査報告記も掲載しております。

末筆になりましたが、本号より高橋元貴（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻）が編集担当となりました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

第75回都市史研究会例会

2012年7月6日、東京大学工学部1号館建築会議室にて第75回都市史研究会例会が行われました。当日は下田桃子氏と角和裕子氏による報告が行われ、活発な討議がなされました。以下、両氏による報告要旨を掲載いたします。

報告要旨 近世江戸の水路管理―江戸川・神田川を題材として―

江戸市中に張り巡らされていた多くの堀や川は、人や物の船での移動に不可欠な存在であり、その機能維持のために近世期を通じて浚作業が頻繁に行われていた。本報告では、江戸川・神田川の浚作業の検討を通じ、近世の都市江戸において行われていた水路管理方法の一端を明らかにすることを試みた。

江戸川・神田川は近世期を通じて浚の費用が幕府によって賄われており、具体的には府内の地代金はその資金に充てられた。また遅くとも享保期には、町奉行管轄下で町人が恒常的な浚（＝常浚）を請け負う体制が取られるようになっていた。請負町人は幕府より下付された助成地の地代金で常浚の費用を賄い、またこの請負人の地位は基本的に相続されるものであった。

寛政期にこの町人による請負体制は廃止される。以降の常浚は勘定所管轄になり、勘定所の御用を勤める者が普請を取り仕切る、幕府による直普請体制に変換された。元助成地からの地代金は一度金蔵に納められ

た上で、浚に必要な経費が金蔵から出された。これら地代金は、馬喰町御貸付金として運用もされていたようである。

明らかになった当該地域の浚体制を江戸府内の他の川々のそれと比較してみれば、府内の他の川々は基本的に町奉行管轄のもと浚が実施されているのに対し、当該地域では寛政期以降、幕末に至るまで勘定所管轄下での直普請体制が取られ続けた。また、近世後期には都市機能維持のため、幕府が商業資本を積極的に利用する傾向が多く見られ、水路管理に関しても文化期には株仲間に負担を転嫁した常浚体制が取られているが、当該地域では一貫して幕府の負担でもって浚が行われた。水路機能の維持・管理に関して、江戸府内でその管轄主体も政策適用の論理も一律ではなかったということは、浚以外の都市政策の実施過程を検討する際にも、重要な視点となるのではないだろうか。

下田桃子（東京大学人文社会系研究科）

報告要旨 彦根藩世田谷領と江戸屋敷——下掃除の実態とその変容——

江戸の武家屋敷の存立において、近郊農村はどのような役割を果たしていたのか。本報告では、上記の問題を検討する一助として、彦根藩の関東飛地領であった世田谷二十ヵ村（世田谷領）に注目し、世田谷領が担った彦根藩江戸屋敷の下掃除の実態の解明を試みた。なお、下掃除によって得られる人馬糞は、農村においては魅力的な肥料（下肥）であった。

十九世紀初頭に作成された下掃除についての議定によれば、彦根藩の江戸屋敷の内、上屋敷と中屋敷の下掃除は、世田谷領内の十数ヵ村の名主（＝下掃除株持ち名主）の特権となっていた。その代りとして、株持ち名主らは、屋敷に対して馬飼料の上納や、屋敷内の芥取除けなどの御用を勤めていた。しかし、名主自らが実際に下掃除や芥を片付ける作業などに従事していたわけではない。名主らは、下掃除や諸御用を遂行するにあたって生ずる様々な事務に交代で従事していたのである（＝下掃除当番制度）。

では実際には、どのようにして下掃除や諸御用は実行されていたのだろうか。十八世紀末には、株持ち名主らが、下掃除の権利を請負人に譲る代わりに、諸御用も請負人に任せ、さらに年に数両の金を受け取る契約を結んでいたことが確認できる。この下掃除と諸御用の一括請負下の実態を示すとみられる帳面からは、請負人からさらに世田谷領内外の百姓へと少しずつ下肥が売り渡されていた様子が窺え、実際に下掃除に従事していたのはこれらの百姓であったと推測できるのである。

最後に、諸御用の内、芥取除けについて見てみると、彦根藩の上屋敷から取り除けられた芥は、最寄りの河岸まで運び出されて処理されていたことがわかる。また、芥の処理においては、江戸町方の者も関わっていた。

このように、十八世紀末から十九世紀にかけては、下掃除株持ち名主（請負人）が屋敷から下掃除を引き受けるという形を保ちつつ、実際には他領の者や江戸町方の者も含めて多くの人々が彦根藩邸の下掃除に携わっていたのである。

角和裕子（台東区役所）

ワークショップ「大山喬平氏の中世社会史論に学ぶ」開催のご案内

10月6日、東京大学文学部・多分野交流室にてワークショップを開催いたします。

長年日本中世史を主導してこられた大山喬平先生をお招きし、先生の近業に学びながら、中身の濃い秋の一日をじっくりたのしく過ごそうと存じます。そして、中世社会史論や身分論にとどまらず、先生の地域論・ムラ論や実践に深く学び、都市社会史、身分的周縁論、地域社会論へと活かす方法をとともに考えたいと希望します。

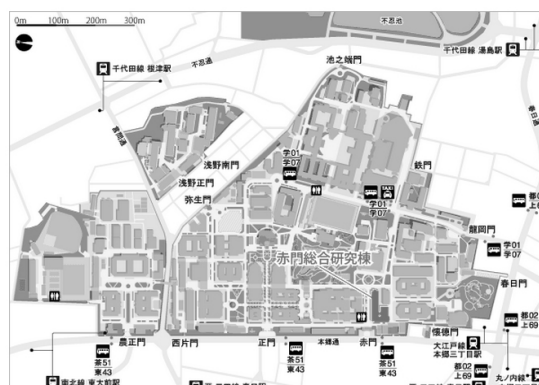
若い研究者や院生・学生の皆さまにとっては、大山史学のエッセンスを直接学ぶ貴重な機会となるはずです。お誘いの上、多くのご来場お願いいたします。

日時：2012年10月6日（日）午前11時～午後5時

場所：東京大学文学部 多分野交流室

（東大赤門を入り、右前の建物〔赤門総合研究棟〕

エレベーターで8階上がりすぐ前です。）



スケジュール：

11時半～13時 セッション1

I部 大山先生の近業に学ぶ——『日本中世のムラと神々』（岩波書店、2012年3月刊）を読む

1. 古市晃氏（神戸大学・日本古代史）
2. 三枝暁子氏（立命館大学・日本中世史）
3. 大学院生（予定）
4. 大山先生からのリプライ

14時～17時 セッション2

II部 「ムラの戸籍簿」——前近代日本の地域を考える

1. 報告：花田卓司氏（立命館大学非常勤講師・日本中世史）
2. 近世史からのコメント：牧原成征氏（東京大学・日本近世史）
3. 大山先生のコメント

17時半～19時

III部 懇親会——大山先生を囲んで

問い合わせ先：tradcities@gmail.com

シンポジウム開催のお知らせ

2012年12月15、16日の両日、本年度のシンポジウムを開催いたします。本年度は「沼地と都市」と題して、研究報告を予定しております。現在、開催準備を進めておりますので、詳細は次号のニューズレターにてお知らせいたします。今回は概要のご案内となります。

日程 2012年12月15日（土）・16日（日）

場所 東京大学工学部一号館15号教室

テーマ 「沼地と都市」

フランス・ラングドック地方の旅

光永理人（東京大学）

フランス沼地研

フランス沼地研究会（以下、仏沼研）では、南仏ラングドック地方の山岳から海浜まで連続的な広がりの中に位置する都市・都市間領域・後背地を対象として、それらを形成してきた自然的・歴史的条件について、また各種インフラなど人間が作り上げてきた環境制御機構とその歴史を研究している。キーとなる対象は、17世紀後半にガロンヌ河と地中海をつなげるという目的でトゥールーズ～セート間に建設されたミディ運河である。

2012年3月7日～14日にかけての現地への予備調査旅行に赴いた。ミディ運河の西端のトゥールーズから出発し、現地での移動は大型のレンタカー2台。東へと進み地中海方面へ抜け、モンペリエから帰途につくという、大きくは西から東への直線的な方向性をもったルートである。参加者は伊藤毅教授以下、文献史学研究者をまじえた総勢10名の仏沼研メンバーである。以下の10名（敬称略、肩書きは当時）。

本研究会は、先行するオランダ・フリースラント州11都市と都市間領域の研究から2010年に派生したが、一方でバステード研究からの継続的研究の性格ももっており、西洋史の専門家と協力しながら幅広く文献研究を行っている。前置きが長くなった。それでは、南フランス、ラングドック地方へ舞台を移そう。

トゥールーズでの歓待

夜に成田空港を発ち、パリでの乗り継ぎを経て、初春の爽やかな空のもとトゥールーズへ降り立ったのは午前9時頃だったのだろうか。空港にてトゥールーズ大学で学ぶ仏沼研メンバーである向井氏の出迎えを受け、予定通りレンタカー2台を借り、調査旅行が始まった。まずは二手に分かれ、市内視察と運河アーカイブの方面へそれぞれ向かった。

運河アーカイブはミディ運河に関連する史料を多数所蔵している施設であり、アルシヴィストのサミュエル・ヴァニエさんの懇切丁寧な案内を受けつつ、90分ほど史料の見学をさせていただいた。

午後にはトゥールーズ大学付属研究所<フラメスパ>

にて全員が合流し、仏沼研の現地での協力者であるアベ、オリヴィエ両教授らと交えたラウンドテーブルが催された。アベ教授は干拓や灌漑をテーマとした興味深い研究成果を発表されており、向井氏の教官でもある。日本側、フランス側双方が、交互に各自の研究内容について一人15分程のプレゼンテーションを行った。夜はトゥールーズ市内のレストランにてディナーに招待していただき、親睦を深め合った。



トゥールーズ大学付属研究所でのラウンドテーブルの様子

さて、歓待から一夜明け、精力的に各地を巡る「グランドツアー」も本格的に開始である。巡見においては①都市間を含む広域のスケール、②個別都市スケール、③建築スケールを設定し、①では都市間の移動経路における周辺自然環境や土地利用を、②では事前の文献調査をもとに選出した都市・集落を、③では訪問都市において伝統的・典型的と目される建築を観察・記録した。ここではエッセイという自由度の高い表現形式をたのみとしながら、いくつかのトピックごとに小文を綴っていきこう。

ミディ運河

私がパリに留学していた頃、通っていた建築学校のメトロの最寄り駅の隣の駅の名前が「リケ＝RIQUET」だったのだが、この名前こそミディ運河の建設者、17世紀の塩税徴収請負人のピエール＝ポール・リケその人に由来する。娘の持参金までなげうつなど、運河建設のための涙ぐましい努力のエピソードも豊富だ。

実際に目にしたミディ運河は、並木があつて水があつて綺麗な景色だな、という月並みな第一印象だった。だが全長240kmの長い運河。高速道路などで運河に近づいたり離

れたりしながら移動していても、太陽とミディ運河の整然とした並木だけはどこまでもついてくる。そして旅行日程を通じて取水源の山地や貯水池、各地の閘門、トンネル、水道橋、運河沿いの街などを訪れて、リケの驚くべき構想力がジワリジワリと脳裏に刻まれていくような感覚を味わった。大西洋と地中海を結ぶこの土木事業は、地形や気候の変化はもとより、文化的にも一枚岩ではない地域を横断し、また各地域のローカルな素材や技術も取り入れながら実現されたもの。運河建設を一人の英雄の功績に安易に帰することには慎重を要さなければならないが、リケが一般に天才といわれるわけを実感した。

ミディ運河については当然、幾多の論点から語られうるものだが、運河と沿岸の各都市との関わり合いなどは興味深い。例えばカステルノダリの街はミディ運河を積極的に誘致した一方で、カルカッソヌは都市のテリトリーを運河が切断することを懸念し、運河が街を迂回することとなった。都市と運河事業者の利害関係が、「運河を都市に寄せる」ことの両義性を派生させるようである。

大きな構想力によって成された事業はその土地に新しい論理をもたらし、「あなたならどう読むか」と訪れる者を時代を超えて挑発するものであろう。今では絵葉書のように風光明媚なミディ運河も、まさにそうした大事業だった。



ミディ運河

広域スケールと干拓地

先に「都市間を含む広域スケール」も観察対象に設定していたと述べたが、仏沼研では東辻氏を中心としてGISを活用する分析の方法論などを模索している段階である。現地調査においては地質図や土地利用図を参照したり、カメラにGPSを同期させ撮影箇所を地図上に同定すると

いった試みも行った。こうした観点からすると車窓からの風景の観察にも非常に意識的になる。東へ移動するにつれて、とりわけ地中海に近づくにつれて、葡萄やオリーブ畑等の土地利用・植生があらわれはじめ、さらに沿岸へ来るとアシ、塩田といった景観構成要素の変化が見られる。

また、ミディ運河が通る低ラングドックには内陸部潟湖が多く存在し、中世に都市エリートの投機としてそれらの干拓事業がさかんであったことも我々の関心対象である。例えばカプスタン。ここは中世に脱塩干拓により繁栄し、ナルボンヌ大司教の居館が置かれた場所である。伊藤教授はここを自動車で通り過ぎた際に微細な地形で景観が分節されていることを指摘しておられた。私は恥ずかしながら何の変哲もない原っぱだと大して気にも留めず、フィールドへの感性を磨いていかねばと感じたものである。

さらに、カプスタンからやや東に位置するモンタディは圧巻だった。中央がくぼんだハート形の干拓地であり、13世紀半ばに近隣都市の3人のプロモーターが干拓を請け負った場所なのだが、すべての土地を同条件に近づけるため、中央から放射状に整然と土地が分割されているのである。モンタディはアベ教授の研究対象のひとつでもあるため向井氏が歴史に明るく、南の丘からこの奇観を見下ろしながら皆に解説を施してくれた。また、南に隣接するマルパはモンタディの排水（中世）、ミディ運河のトンネル（近世）、鉄道のトンネル（近代）が交叉するささやかな名所となっており、小さな観光ショップも開設されている。我々が店内を訪れた際、店員の方々にとって大人数の日本人客が珍しかったらしく、思いがけず記念撮影をせがまれたことは良い思い出である。



干拓地モンタディ

強風のセルス

本日天気晴朗ナレドモ風強シ。……全日程が快晴、雨は一滴も降らず。これ以上望めないほど空には恵まれた旅だった。加えていくつかの街では、台風ばりの強風を、その地域独自の自然に対する実感が深まるというポジティブな意味で体験した。

「セルス—cers」と呼ばれる強い西風がそれである。ロワイヤル仏和辞典にも「ラングドック地方南部に吹く強い西風・北西風」と掲載されている。標準フランス語と異なり、最後のsを読む発音も地域性を感じる。この地域に残されている歴史的な史料にも、住宅関係の記述に際してセルスを方角の基準としていたりするなど、暮らしに密着してきた風だという。

例えばグリュイッサンの街の要塞の頂上では、まともに立っているのすら困難な強風。だが、ふもとの集落部分では風は穏やかだった。巧みに風を避けた集落立地だとしたら高度な環境共生都市だとも言えそうだ。さらに、海から内陸に登ってポルテル・デ・コルビエールの集落。渓谷にかかる橋からは遠くに望む海にまで飛ばされてしまいそうで大変怖かった。エスカリエ・デュ・セルス（セルスの階段）という名前の通りも見つけられた、風と坂の街。

都市・集落巡見

運河、沼地、風ときて、続いては訪れた都市について筆を進めていこう。数え上げたところ、1週間の旅程中に約20の都市・集落を訪れた。まず拠点となる都市は、既出のトゥールーズや、古代ローマ時代に起源をもち、大司教座のおかれていたナルボンヌ、ミディ運河の地中海への出口である海港都市セート等である。他、西の内陸部ではいくつかのバスティード、山上にありながら水の豊かな集落セサック等を、東の地中海方面ではリケの出身地であるベジエ、ナルボンヌ大司教所有であった海辺の要塞グリュイッサン、エロー河とミディ運河との合流点にあたるアグド等を訪れた。

さらに、調査の中でしばしば出会った特徴的な都市類型

に、インカステラメント（「城塞化」）という過程を経て集落化したものがある。典型的な事例として見学したアレーニュの集落は、小高い丘の上でかつての砦を取り囲むように同心円状に集落が展開している。丘の頂上にあたる円形の小さな広場にて加藤玄准教授や向井氏がこの集落の生成現象について解説を行ってくださり、一同周りの町並みを見回しつつ耳を傾けていたことが思い出される。

周囲の自然・地形との関係において深く印象にのこったのは、サン＝ギエム＝ル＝デゼールとエグ＝モルトの二つの中世都市である。ともに条件は異なるが、険しい自然環境のただ中に建設された都市の構えに素朴な、しかし深い感動をおぼえた。

サン＝ギエム＝ル＝デゼールはエロー河を北に遡ること数十キロ、エロー河に注ぐヴェルデュ川沿いに形成された小集落。9世紀初頭に創設された修道院を中心とした集落であり、サンチャゴ・デ・コンポステーラの巡礼路にあたることに加え、小巡礼地としても巡礼者を集めてきた。山地の圧倒的なロケーション、その谷筋に象嵌されたようなりニアな集落、小川とも絡み合った迷路的な都市構造…それらは機会があればじっくりと時間をかけて調査したいと触発するものであった。

そして旅の最終日に訪れたエグ＝モルト—ルイ9世が地中海沿岸の貿易を一点に集めようと建設した経緯をもつ—は都市のシルエットとしては対照的だ。ローヌ河口のカマルグの大湿原に位置し、矩形の城壁に囲まれた整然としたグリッドによって構成されている。「エグ＝モルト」とは「死んだ水」の意であるが、その名の通り何もない湿地帯に忽然と都市が現れるのである。の午後、やや強い日射しのもと皆で幾何学をなぞるように城壁を一周する。まだ暑い日射しの残る夕方近くエグ＝モルトを後にし、モンペリエ空港へと車を走らせ、濃密だった調査旅行も無事終了へと向かった。

News Letter 都市史研究 Vol. 70
2012年8月24日発行

事務局：〒113-0033 文京区本郷7-3-1 東京大学大学院工学系研究科建築史伊藤研究室内
編集担当：高橋元貴（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻）
レイアウト原案：岩本馨（京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科）